

学位論文題名

隋唐国家論

— 諸制度の形成と理念 —

学位論文内容の要旨

本論文の目的は、隋唐時代の諸制度の編成に共通して見られる理念を抽出し、隋唐国家の特徴と性格について明らかにすることである。隋唐時代には多くの制度が存在するが、検討対象として官制、都城制、身分制を取り上げるのは、そこに隋唐朝の抱く国家編成の理念が強く反映されていると著者が考えるためである。

第一部では都城制が検討される。従来論じられることのなかった都城（宮城）の東西軸の重要性に注目し、各種史料に基づいて、都城内部の空間配置と構造的変遷を丁寧にあとづけることにより、隋唐長安城の成立に新たな視点から歴史的評価を与える。

第一章では魏晋南北朝の都城にみられる東西軸の性格を考察する。魏晋南北朝の都城を構成する宮では、太極殿を中心としてその東西に皇帝の居住・議政空間である東西堂、主要官庁である尚書省や門下省、官僚の議政空間である朝堂が並列して存在している。これは後の隋唐長安城とは根本的に異なる構造である。この東西軸構造は官僚の動きや政策決定など、この時期の都城中枢部における政治的空間利用のあり方を背景として形作られたものと考えられる。魏晋南北朝時代において官僚は一般には宮東部の東掖門と雲龍門を使用して宮に出入し、それに応じて太極殿東側には皇帝と官僚を結ぶ空間が重層的に配置され、西側には皇帝の私的空間が配置されていたのである。一方、この東西軸とは全く対照的な性格を備えていたのが、都城における南北軸のあり方である。南北軸上には天の中心太極を地上に実現した太極殿、皇帝のみが重要な儀礼の際に通過できる端門、祭天儀礼の舞台など、皇帝の権威や絶対性と密接する空間が配置されている。また南北軸は官僚の一般的な移動には利用されず、皇帝が特殊な儀礼の際に移動する軸線である。つまり東西軸は皇帝の日常生活や、官僚による議政がなされる日常的軸線であり、南北軸は皇帝の超越性に関わる非日常的な軸線とすることができる。

第二章では、以上の議論を承けて、この東西軸がさらにどのような歴史的系譜を持ち、そこにいかなる性質を認めることができるかという点が検討され、隋唐長安城においてそれが消滅する意味について考察がなされる。系譜論的に見れば魏晋南北朝の都城に見られる東西軸は先秦以来の「家」の構造に通じる性質のものである。楊寛氏が指摘するように、前漢までの多くの都城は東方に正門が設置され、東方から入宮する「坐西朝東」の構造であった。楊氏はこの構造が後漢以降、坐北朝南の構造に転換したとするが、著者はそれが実際には、新たに成立した南北軸と共存しつつ、魏晋南北朝の宮城まで受け継がれていったことを論証する。そして隋唐長安城における東西軸の消滅の背景には、その機能の低下があったと結論づけるのである。魏晋南北朝時代においては東西軸に沿って三公府や百官朝会殿、尚書、東堂、朝堂などが存在し、それらは皇帝と官僚による議政がなされる空間であったが、皇帝の主導性が徐々に強まり、官僚の議政の役割が低下していく中で、東西

軸を構成していた尚書や朝堂は南北朝後期には地位を大きく低下させ、隋唐時代には宮南側に移されて東西軸は消滅するのである。隋唐朝は『周礼』に則って南北軸を中心とする都城を新たに建設するが、それが可能となる背景にはこうした東西軸の機能の低下があったと考えられるのである。

第二部では官制について検討が加えられる。特に煬帝期の官制改革を取り上げるのは、この改革が唐代の官制と密接な関係にありながら、隋文帝期や唐代の官制に比べて研究が薄く、隋唐官制の性格について考える上で課題であると著者が考えるためである。

第一章では煬帝期の官制改革の全体像を把握するための準備として、官制の各部門ごとに系譜と機構及びその変化について整理が行われる。

第二章ではこれをもとに煬帝期の官制改革の目的と理念が考察される。この改革の目的は文帝期の制度を整理再編するとともに、南北統一を受けて、割拠政権的な要素や過剰な軍事的性格を除き、『周礼』や漢代の官制を取り入れることで普遍性を獲得し、正統性を示そうとするものであった。続く唐の官制は、漢制の採用という点では煬帝期の改革を放棄したものの、基本的な制度や『周礼』の重視という点は継承している。

第三部では身分制が検討される。特に唐代の主要な身分である良民、部曲客女、奴婢についてその身分設定の原理が追求される。

第一章では奴婢身分が検討される。まず奴婢の法的性質について検討し、従来、半人半物と理解されてきた奴婢は、基本的には人としてとらえるべきであることを指摘する。次に奴婢と礼の問題について検討し、唐代の奴婢は礼的秩序の外に置かれた存在ではないと主張する。さらに奴婢と在地社会の隸属関係との関連について考察し、両者は直接には関係せず、奴婢は国家的身分であることを明らかにする。最後に以上から奴婢身分設定の原理について考察し、奴婢身分は隋唐朝が古典の齊民制を理想とするとともに、人民の自立性を重視することによってもたらされものであると結論づけている。

第二章では、隋唐時代に特徴的な身分である部曲客女を取り上げ、唐代の身分編成の原理について考察する。部曲身分の成立については在地社会の階層分化を反映した身分であるという説と、国家的身分であるという説とがあるが、著者は唐律の検討を通じて後者の説を支持する。その上で部曲身分設定の理由について考察し、奴婢や良民と同様に、唐朝による人民の自立性を重視する姿勢によって生み出された身分と考えている。

以上三部の検討結果をもとに、最後に隋唐国家の性格とその崩壊の実態が考察される。隋唐国家は『周礼』や漢という古典的な国家を理想として建設されたものであった。後漢から魏晉にかけて中国は大きな社会的変動を経験する。北方の遊牧民が黄河流域にまで南下し、華北は様々な民族が混交する世界に変貌した。また庶民層の分解が進み、客や部曲と呼ばれる人々が史料上頻見されるようになる。さらに山東や江南の開発が進み、世界の多元化が進展した。魏晉南北朝時代は以上のような変化に対応して新しい国家のあり方を模索した時代であった。しかし隋唐朝は南北統一を実現すると、南北朝のような変化へ対応していく路線を改め、逆に漢制や『周礼』にならった理念によって社会を規制していくとしたのであった。

唐中期における諸制度の崩壊は社会的な変動によるとする見方が一般的であるが、著者によれば、実際には上記のような隋唐国家の性格によってもたらされたのであった。つまり社会的な変動によって制度の有効性が失われたのではなく、『周礼』や漢制を理想として作られた制度と社会との間には本来本質的な乖離があり、唐中期に政権の支配力が弱体化したことによってその乖離が顕在化した、と理解すべきなのである。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 津 田 芳 郎 (東洋史学講座)

副 査 助教授 吉 開 将 人 (東洋史学講座)

副 査 教 授 南 部 昇 (日本史学講座)

学 位 論 文 題 名

隋 唐 国 家 論

－諸制度の形成と理念－

本論文の目的は、隋唐時代の諸制度編成に共通して見られる理念を抽出し、隋唐国家の特徴と性格について明らかにすることである。隋唐時代には多くの制度が存在するが、検討対象として官制、都城制、身分制を取り上げるのは、そこに隋唐朝の国家編成の理念が強く反映されていると考えるためである。

第一部では都城制について検討する。従来、論じられることのなかった東西軸とその消滅という観点から隋唐長安の成立について考察が加えられる。まず第一章では魏晋南北朝の宮城に見られる東西軸についてその構造と機能について明らかにする。東西軸は議政空間である東西堂をはじめ、尚書省、門下省、朝堂などからなり、日常的な生活や議政がなされる軸線であり、皇帝の超越性を象徴する南北軸とは対照的であった。

第二章では東西軸の系譜と隋唐期における消滅について考察し、隋唐長安の設計理念について検討が行われる。東西軸は秦漢宮城の坐西朝東の構造に由来し、隋唐長安におけるその消滅は政策決定における官僚の議政の地位低下を反映したものであり、南北軸に基づく『周礼』的な隋唐長安は、かかる東西軸の弱体化を背景に成立したものであった。

次に第二部では官制について検討する。特に研究の薄かった煬帝期の改革について検討し、その上で隋唐官制の編成理念が考察される。

まず第一章で官制の各部門ごとに系譜と機構及びその変化について整理し、それをもとに第二章では煬帝期の官制改革の目的と理念が検討される。この改革の目的は文帝期の制度を整理再編するとともに、南北統一を受けて、割拠政権的な要素や過剰な軍事的性格を除き、『周礼』や漢代の官制を取り入れることで普遍性を獲得し、正統性を示そうとするものであった。続く唐の官制は、漢制の採用という点では煬帝期の改革を放棄したものの、基本的な制度や『周礼』の重視という点は継承している。

第三部では身分制が検討される。特に唐代の主要な身分である奴婢と部曲客女についてその身分設定の原理が考察される。

第一章ではまず奴婢身分設定の原理について考え、隋唐朝が古典の齊民制を理想とするとともに、人民の自立性を重視する姿勢によってもたらされものであると結論づける。続いて第二章では部曲客女身分の考察がなされる。部曲客女身分の成立については在地社会の身分分化を反映した身分であるという説と、国家的身分であるという説とがあるが、著者は唐律の検討を通じて後者の説を支持する。その上で部曲身分設定の理由について検討

し；奴婢と同様に、唐朝の人民の自立性を重視する姿勢によって生み出された身分との結論が示される。

最後に以上の考察から隋唐国家の性格とその崩壊の実態について考察が行われる。隋唐国家は、後漢以来の身分分化や遊牧民の南下によって重層化・多様化した社会を、再び『周礼』や漢代の理念のもとに支配しようとして形成された国家である。唐中期における諸制度の崩壊は、社会的な変動によって引き起こされたのではなく、上記の理念のもとに社会を統制しようとする隋唐国家の性格、すなわち理念の純化とその社会実体との乖離に由来するものである、との認識が示される。

本論文はいくつかの検討すべき論点が残されている。特に本論文の第一部と第二部の議論と深く関わる王朝の儀礼や礼制の側面について、本論文における著者の議論との整合性が十分に検討されていないこと、また「軸」構造と都城の空間利用により直接的に関わる方位観や「復古」をめぐる議論に関わる歴史意識、さらには当時の社会にあって諸制度の理想的なモデルとされていたと筆者が強調する『周礼』思想の受容のあり方など、同時代におけるより思想史的な側面についての議論が乏しいことは、本論文の体系性という点から見てやや遺憾に思われるところである。しかしながら、これらについては本論文の基礎の上に今後著者によって研究の展開が新たに図られるはずの分野であり、その成果が大いに期待されるものである。著者が卒業論文以降学界に公表してきた論攷（第一部の一章、第二部の一、二章、附論等）はすでに学界において高い評価を得ており、本論文に収録される未公表の論攷はより高く評価すべき水準を備えている。著者の各論攷に啓発され啓蒙される部分は少なくなく、それらを総合した本研究は疑いなく隋唐時代史研究を大きく押し進めたものといってよい。よって審査委員会は全員一致して本論文が博士（文学）を授与するにふさわしいものと判断する。